

増谷外世嗣 編著

W.B. イェイツ 論

仮面の変貌

W.B. YEATS

南雲堂

著者略歴

加納秀夫 かのうひでお 1911年生れ。1934年東京大学英文科卒。前青山学院大学文学部教授。〔主要著書〕『危機と想像』（研究社）、『現代英文学論』（南雲堂）

増谷外世嗣 ますたにそとよし 1924年生れ。1948年東京大学英文科卒。現在、一橋大学社会学部教授。〔主要訳書〕G. S. フレイザー『W. B. イェイツ』（研究社）、F. R. リーヴィス『現代詩の革新』（南雲堂）

羽矢謙一 はやけんいち 1929年生れ。1953年東京大学英文科卒。現在、明治大学文学部教授。〔主要著訳書〕D. H. ロレンス『愛と生の倫理』（南雲堂）、『D. H. ロレンスの世界』（評論社）

鳥海久義 とりうみひさよし 1932年生れ。1960年早稲田大学大学院修士課程修了。現在、和洋女子大学教授。〔主要著書〕『エミリ・ブロンテの詩の世界』『ヤースの詩と信念』（開文社）

内藤史朗 ないとうしろう 1933年生れ。1957年京都大学英文科卒。現在、大谷大学文学部教授。〔主要訳書〕ラスキン『芸術教育論』、W. モリス『民衆のための芸術教育』（明治図書）

風呂本武敏 ふろもとたけとし 1935年生れ。1960年京都大学大学院修士課程修了。現在、神戸大学教養部助教授。〔主要訳書〕W. H. オーデン『演説者たち』（国文社）

W・B・イェイツ論

一九七八年七月二十日 一刷発行

定価 二五〇〇円

編著者 増谷外世嗣

発行者 南雲克雄

装幀者 栗津潔

印刷所 大蔵省印刷局朝陽会

発行所 株式会社南雲堂

東京都新宿区山吹町二〇一郵便番号三

電話東京（二六八）二三一一（代）

振替口座 東京六一四六八六三番

製本 岡本製本

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通販係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

検印廃止

© 1978 Nan'un-do Publishing Co., Ltd.

Printed in Japan < 1B-100 >

3098-310100-5625

W.B.イエイツ論

仮面の変貌

増谷外世嗣 編著

W.B.YEATS

南雲堂

W・B・イエイツ論・目次

序論Ⅱ増谷外世嗣 7

アイルランド精神Ⅱ風呂本武敏
その二重性 17

サーカスの獣たちⅡ鳥海久義
イエイツの神話的世界 57

イエイツとロレンスⅡ羽矢謙一 105

仮面の変貌Ⅱ増谷外世嗣 133

イエイツ詩——後期の一面Ⅱ加納秀夫
夢幻詩と狂想 169

イエイツと東洋思想Ⅱ内藤史朗

207

後記

261

イエイツ研究書誌選

278

イエイツ主要作品年表

283

イエイツ事項年表

288

序
論

増谷
外世嗣

歌心をもよほす、とか、子供心にかえるという。

詩心というほどのことはなくとも、仕事に追われる日常生活の間隙にふと何かと調和する遊びの心をとりのどしたような時にいわれるようである。それは間隙的ではあるが、日常的に現実味をおびている時間でもある。とはいえ、それは仕事を忘れた時というような条件をひかえている。淡い時間ではある。

だが、詩情とか詩心という、そこに少し影りをおびたものが感じられる。日常現実の生活から敢えて一步踏み出すか、踏みはずして、それとは別な意味にひたる或る持続的な時間と空間を見出した時のように思われる。われわれは、藤村や白秋を思い出す。けれども、それは現実の生活との不調和というか。それとの裂傷を思わせるほどの心の捉え方ではないように思われる。たとえ相反するものでもやわらかく人間存在の全体の中に織りなされて行くわれわれ日本人の生活態度そのものの中に培われてきたそのようである。芭蕉や蕪村がその全存在を詩心にかけたとしても人間存在の現実との裂傷が主要な場をしめる生の問題として表立ってはいない。表立っているか、いないかのよしあしは別として、そういう表立っていないものを近代精神が分析したとしても、それは近代以後の詩精神がそういう詩心の結実というか成立過程の不思議さ、或は、心然性やその充全性を証かさんとする情念に支えられた論理的欲求がそうさせたのである。

ところでこのような個人的感慨めいた文章を敢て初めに持ち出したのは、これを一つの例証に供しなかったからである。読者はこの短い文章の中に歌心とか詩情とか詩心という言葉が何時の間に詩精神という言葉へ移動していることに気づかれるであろう。これは敢えて筆者が意識的

に試みたのである。それは詩精神という言葉の含意の背景には、いわずもがなのことのようにでもあるが、歌心とか詩心のそれとは違って、必ずや近代或は近代をも含めた現代の社会的、人間的、諸変革が織りなしてきた現代文明の地模様がひかえていることを特に喚起したかったからである。そして、そのような地模様の中に亀裂をおこしているところで、或る背反と融合に苦しむ姿が詩精神という言葉には感じとられるのである。われわれは朔太郎を思い出す。

何故そのようなことを初めに持ち出さねばならないように思ったかといえ、欧米の近代をも含めた現代詩人をわれわれが論じる場合、そのような地模様が、それらの詩精神の抱えた問題を理解する共通の地盤としてあることを程度の差こそあれ、大きい前提としてふまえていることになるからである。

われわれが英語で詩を読む。読むにつれてどこまで読みとれるのか自問せざるを得ない局面に出くわす。言葉の根本的理解にかかわる問題であるが、技術的な問題が随伴してくる。異国の言葉が歴史的、伝統的、風土的に、重層して背負っている意味や情念をどれほどまで理解できるか。それでもまがりなりにも何故読めるか。十九世紀産業革命以後、人間から歌心を奪って苛酷なまでに八仕事Vへと追いやったイギリスの歴史はわれわれのそれよりも遙に長く根深いもののあることを詩人たちはもの語る。詩が人間Vの現代Vへの戦いとなったことの意識の長さや深さが克明にくり展げてきた共通戦線がわれわれを呼びこむ。と、こういつてしまえば一言ですむようであるが、しかし、このような前提的な問題にしぼって根本的に、且、具体的に立ちかえってみることは、それ自体重要な問題であり、それなりの大きいスペースを要する重要な課題であるこ

ともわきまえてはいながら、今はそこに立ちどまることは割愛して行かねばならないことを一言ことわっておかねばならない気がするのである。

今、私たちがアイルランドの詩人でもあり、そして又、英詩の領域の中では、T・S・エリオットやW・H・オーデンと並んで現代の大詩人として取扱われているW・B・イエイツを論じようとするにあたつて、やはりこのような前提を各筆者なりに充分ふまえつつ、作品の精神にでき得るかぎり迫ってみようとする努力を払ったことは当然のことながら、一步を進めてイエイツの作品固有の具像性に情念の中で深く触れ合うにはわれわれの理解をばばみ、衝突せざるを得ない多くの壁がある。そして実はそこから詩論としては問題なのである。

極めて概括的な言い方であるが、われわれがこれらの詩人の作品解釈をするにあたつて主たる衝突を起こすのはむしろ、それらの詩精神が抱え、そしてそれを現代的模様の中に蘇らせようとしたそれぞれの伝統的精神である。つまり、現代的模様様が理解の共通地盤としてあることが前提としてある限り、その詩人がそこに蘇らせようとして象徴的になつた伝統こそがわれわれの衝突せざるを得ない主要な焦点となってくる。これは、序論めいたものの中で、各筆者に先走つたことをいうようであるが、こういう研究を日本語の読みものとして、われわれの中に提示しようとするものの最初にことわらねばならないことのように思われるのである。

エリオットとオーデンの作品模様の中に、現代英詩の世界における思想のたどりついた右と左というべきほどの両極的相違が読みとられても、この両者をイエイツと比較した場合、この両者とイエイツとの相違は両者間のそれとはまったく異質のものであることに気づかされる。つまり、

イエイツがになった伝統的要素からすればエリオットとオーデンの相違はやはり同質の世界の中の両極的相違であることに気づかされる。

既に、一九三二年、F・R・リーヴィスが『現代詩の革新』(New Bearings of English Poetry)の中でイエイツのこの本質についているが、特に一九三九年、イエイツの死後から、現在に至るまで、イギリスにおいて夥しく多面的なイエイツ研究がなされてきたことは一面このことを物語っている。つまり、アイルランドの民族的諸問題を人間的問題として、その一身にも抱えたイエイツの詩精神が結実させてみせた詩的模様がイギリスの詩人達の、いわば汎人間的なそれらとは如何に異質な織りなし方をしているかが大きな関心の的となったのではなからうか。

イエイツは今、——まだ、というより現在、動いている。アイルランド人であることの宿命とイギリス人であることのそれとの間に長く孕まれていた民族間の宿怨の歴史は第一次大戦前から一九二〇年代にかけてアイルランド自由国家の成立まで陰惨な悲劇をくり展げ、一九三〇年代までくすぶり続けているが、それは両大戦の表玄関の蔭に隠れてしまったようである。大げさな言い方かも知れないが、現代に生きることと、アイルランド人であることからくる悲喜の運命がイギリス人であることの運命からくる陰^キ面^ガを陽^ガ面^ジにしてみせたイエイツの意味は今、まだ多様な解釈の中に動いている。

その青春時代、破れ靴をはいて大英博物館に通った頃、靴下にインクをぬって靴の破れをめだたないようにする。パンとお茶の昼食のためにバス代を節約すべく歩いて通い、逆にバス代をひねり出すべく女友達のところへお茶を飲みに行く、といったような生活が自叙伝に楽しく戯画的

に描かれている。作品や人生論、芸術論に見られる、民族的誇りをとりもどそうとしたイエイツの哀願のようなものの中には、政治的にも生活的にも厳しい民族的屈辱を血肉でなめながら、しかもそれによって人間的帰一性を犯されまいとする孤高な屈折が読みとれる。しかし、又、民族的屈辱からくる物質的貧しさの中にあつて決してそれとちぐはぐな知的驕りに陥したところはない。イエイツの作品に見られる圧縮された或る簡潔な様式には何ら表立つところはないが、驕りを戒める厳しさが自然に備わっていることが何時の間にか感じさせられてくる。エリオットやオーデンの扱う人間的苦悩の誇りが、イエイツを引合に出した場合——もしそうしなければそのまま汎人間的共感であるものの——民族的屈辱に我が身はさらされざるものの言葉への驕りに身を寄せた階級の影のようなものさえ感じられてくるのである。オーデンはイエイツの死の直後、追悼の情やむなく、詩を詠んでいる。暗い冬の寒空に凍結する岩山の上に遠吠する歌声のように、その詩人なくしては聞き得ない厳しい時代の声がオーデンの胸にしみわたっている。

そして、今一つイエイツをして現代詩人の中で独特な意味をもつ詩人たらしめているのは彼が世紀末審美主義の思潮の中から育ち、それを全面的に享受さえしていたことである。

もし、一九一〇年頃までの作品を対象とするならば、E・ウィルソンの『アクセルの城』(The Axel's Castle)に見られるように、鍊金殿堂の妖精たちと交つて現実を逃避した審美主義に溺れ、やがて現実には裁れて凋んでしまうであろうと評されることもあり得る。アーネスト・ダウスンやライオネル・ジョンソンが三十代で若死をして凋落して行つた例が世紀末審美主義の懸念さるべき成り行きの印象的零断氣をかもしたして行つたことはあろうが、しかし、イエイツの審美主義

は厳しい現実の裁きを受けつつ、大きく変貌して行つた。そして、その幾多の変貌過程の全道程から初期の所謂審美主義的作品と見られていたものも、ふりかえて見れば、実はそのような変貌性をそなえていたものであることにも気づかれてきたのである。それはイエイツの作品自体が語って行くことであることは勿論であるが、一方において審美主義なるものの捉え方も深く變つてきたこともあざかつてゐる。

ペイターからスウィンバーンやワイルドへと流れて行つた審美主義的思潮は芸術の世界では或る意味で一つの大きな流れであつたかも知れないが、現実の社会では大きい時代的潮流に対する小さい片隅にあつた抵抗である。産業革命期以来、宗教や科学や芸術の分離状態に追いこまれ、人々は経済生活と文化と道徳との分裂に悩まされてきた。そこにいろんな統合が試みられ始めた。だが、いろんなこじつけの誤つた統合がなされつつあることに對して、逆に生活の或る抽象化がおきていた。アーノルドからペイターへの移行が象徴的に語っているように全一的生活を志向しつつも、或る抽象的純粹志向が起きていたのである。瞬間を全一的に生きることへの志向が美的感覚を鋭くし或はそれに酔うことに人生の価値を見出そうとした。と、見れるような現代における芸術的価値の探究につながる重要な問題も孕んでいたのである。

若き日に、詩的世界に自己の全存在をかけてみようとしたイエイツにこのような思潮が加担したのであることは汲みとれるが、しかし、イエイツの美的觀念の器は大きく成長し、現実を俯瞰し、深く見抜いて行く変容力を發揮して行つた。そして、このこと自体、実は本論の論文の中の幾つかに多少とも重要なテーマとして展開されているものである。

ところで、日本においても、現在、イエイツについては多くの研究が各種の研究誌に発表されているが、しかし、一般的にはわずかの翻訳と著書が出版されているだけでエリオットやオーデンのようにポピュラーに親しまれている詩人とはいえない一面がある。先程来も述べてきたように英詩批評界に未だ諸問題をなげかけていることもさることながら、更に日本語による紹介となると、言葉の問題として、イエイツの象徴的作品構造によって筆者の側にも読者の側にも別な困難さがともなわれてくることもあずかっているだろう。現段階では、少数の研究者がその全貌的な領域を概括的にカバーするよりも、その変貌過程の幾つかの主要な山に力点をおいて、本質糾合に向う多様な解釈例を織り合せて、——敢えてカバーしきれない欠落面は充分心得ながらも——イエイツ研究の一角を動かし、他の多くの研究が広く問われて行く端緒ともなればという願いが本書の編集の意図である。

尚、本書の副題に「仮面の変貌」とつけたことについては、六編の論文中の編者の一編、「仮面の変貌」の題を編者が恣意的にとりあげたものではない。執筆者達の話し合いによるものである。六編の論文全体が自ずと紡ぎ合つて、生涯と作品の展開過程の中で変貌する仮面を語るものともとれようし、或は、作品が仮面そのものの様相として、視角によって変貌するものともとれるし、又一面、素顔から仮面への変貌ともとれる。その多義性の中に敢えて本書の標題を置くことに合意したのである。

尚、論文掲載の順序については、各論文の課題、内容からして、このような順を追って読んで頂ければ、イエイツ理解の障壁が前後関係よろしく攻略されて行くように思われたからである。